

# 反障害通信

10. 7. 23

22号

草の根の運動とそのネットワーク作りから大きなうねりを作り出すために

「障害者運動」の個別のとりくみ(いくらか、少なからず)では、「民主党が政権をとれば自分たちの問題は解決される」という期待があったようです。当事者委員が「過半数を超える」「推進会議」(前号コメント)の設置と議論の始まりは、その期待を膨らませていました。

で、政権奪取以降の民主党の迷走、そして、推進会議のあたまごなしに自立支援法の改正案が出されるのに及び(たぶん、これには政治的かけひきのようなことがあり、とにかく出しておく必要があるとして出したという裏事情なことがあるのかもと考えたりしているのですが、もしくはそのようなこととして厚生労働省の官僚に丸めこまれた? とかいろいろ考えられるのですが)、ともかく、民主党政権奪取の意義は、「民主党はしょせん保守であり、そこで「障害者」に対する画期的な政策など出てこないよ」ということが分かったということに収束しそうです。

さて、わたしはずーっと思い続けていることは、「障害者運動」は、どうもふたつに分離している、ひとつは運動と遊離したロビー活動とそれから草の根の個別課題に埋没してしまっている闘いに。

わたし自身の体験があります。わたしは「障害者運動」が自分たちの交渉力で状況が切り開けない中で最後の闘争手段としての裁判闘争支援として(ネットワーク作りを考えてもいたのですが)いくつかの取り組みをしていました。そういう中で、支援費制度ができ、その支援費の上限設定や自立支援法制定の際、その動きを押さえませんでした。そもそも福祉ということへの批判もあったからですが、その動きが「障害者」をとりまく状況に大きな意味をもっていることやつのことでとらえ返していった経緯がありました。そして、個別の闘いが大きな状況に規定されて壁に突き当たっていくという現実を感じていました。

もう一点個別の闘いが個別の狭い枠内で解決を図ろうとするときに、「障害者運動」生命線であるユニバーサルな性格を踏み外して、そして現実の問題ということで、その個別の枠内で解決を図ろうとしていくことも出てきます。

確かに現実に問題を抱えているひとから相談を受け、そして他に動けるひとがいないときに、現実に動かざるをえないというところで動いていく状況ということは心情的にはわかるし、わたしもそんな動き方をしていることもありました。

でも、それでは悪無限的モグラたたきの活動に陥っていきますし、前述のように、無からさらに自ら分断の負の局面に陥っていくということさえ生まれてしまいます。

で、どうするのか、個別の闘いをつなげながら、障害問題を根底的にとらえ返し、解決

していく団体の結成の中で大きなうねりの運動を作っていく事が必要なのですが、まずはユニバーサルな総体的観点をもった、ラジカルなとらえ返しをする指向性をもった「障害者」の集まりを作っていきたいと思っています。そして、いくつかの重点課題を設定し、そこから状況を切り拓いていくとりのくみをと考えています。

わたしの個人的思いで言えば、競争を否定し、争いがいやだからこそ、争うことを否定するための闘い、いわば政治を廃棄するための政治、ということで、押しつけ的なことを嫌うがゆえに政治的センスがないとされることになるというジレンマを抱えつつ、それでもこの社会では(障害者は)自らの存在を否定されるがゆえに闘わざるを得ないから闘うとして闘い、運動の有効性も求められます。故横塚さんの「はやく、ゆっくり」ということばに示されるジレンマと同じようなことを抱えつつ。

さて、そもそもこの反障害研究会という設定をしたときに、研究会から運動へとして、反障害運動、その同じ名称の会作りを模索していたのですが、会として動き出せていません。

改めて、わたしの設定した会、そして名称にこだわらず、この指とまれの活動を作り出していきたいと思っています。

心動かされたひとの応答をと願っています。研究体、運動体二方面から。 (み)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 22号」アップ(10/7/23)
- ◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

ブログのタイトルは「たわしの雑感&読書メモ」

URLは <http://blogs.dion.ne.jp/hiroads/>

- ◆この「通信」の休刊中につなぎ的な意味も込めてブログで「読書メモ」を掲載していました。この「通信」を「個人誌」的なところから抜け出させる意味でも、読書メモをブログに移すことを考えています。読書メモの中で特にとりあげるものを、再読し書評という形を出していくことです。が、インターネットをされていない読者もおられます。まだ、きちんと広げていく作業もできていません。というところで、当面二重掲載します。

- ◆「反差別論序説草稿」改稿予定。
- ◆「障害ってなーに？」執筆中
- ◆「ベーシックインカム論の整理のために」(仮題)執筆中

## お知らせ

- ◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。印字でうまく出ないとき、読み込めないときはメールで連絡ください。また縦2段組みで印刷したのものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

## 読書メモ

ブログで継続していたのを同時掲載にしています。

たわしの読書メモ・・・ブログ 82

### ・R. D. レイン『ひき裂かれた自己—分裂病と分裂病質の実存的研究』みすず書房 1971

ずーっと気になりつつ、読み落としていた本です。

「反精神医学」の論客とされるレインの代表作。

そもそも今は、「分裂病」ということばは使われていません。「統合失調症」ということばに変えられてきているのですが、この本の中で、「分裂病質」という概念が出ています。これについては「病質」ということでの新たな差別が起きてくるとして批判がおき、今は「親和性」という表現に変わっているようです。

この本で、かなり「分裂病論」の細かい内容が展開され、発生のしくみとかも分析されています。なぜ、これが反精神医学か、むしろ医学モデルではないかということをごちゃごちゃと考えていたのですが、そもそも「分裂病質」という概念が後に一人歩きしたのですが、そもそもレインは、「病」の発生は家族関係を中心とした関係の中である種の性格があれば（しかもその性格はかなりのひとがもっているとして）誰にでも発生しえることとして主張しているようです。そして、その発生のメカニズムを家族の過介入と放置ということとしてとらえているようです。そして、そもそも自己防衛としての「狂気」の現出があるのだということも押さえています。

そのようなこととしての反精神医学、前にも書いたように、精神医学があまりにも「異常」としてとらえることへの批判としての反精神医学なのですが、医学自体を少なくともこの本の中では否定していないという意味で、精神医学批判ということばが妥当かもしれません。

レインの本を何冊か入手しているのですが、ちょっと「寄り道」をしてから、また戻ります。

たわしの読書メモ・・・ブログ 83

### ・大熊一夫『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』岩波書店 2009

この本の著者は朝日新聞の記者時代に、精神病院に「アル中患者」を装って潜入し、「ルポ・精神病棟」という精神病院のひどい実態を曝いたひと。で、イタリアの精神病院を捨てた実践を現地に何度も訪れてインタビューを重ねて書いている本です。

イタリアの実践はバザーリアというひとのリーダーシップが大きかったということを描いています。また、紆余曲折があり、引き戻される恐れもあるのですが、精神病院ということもなくして地域医療センターという形でやりきれんということを実証しているのではないかと思います。日本も精神病院のベットを減らしていこうという動きはあるのですが、むしろ中途半端に精神病院を残さないほうがいいのではということを感じさせます。

日本の取り組みも紹介されています。ここでも、べてるの話が出てきます。イタリアは医療関係者と役人の連携が軸になっているのですが、べてるは当事者の存在が大きく、しかも反転ということが強く出ていて、その斬新さは特筆すべきことです。

以前、べてるの本の読書メモで浦河という過疎という地域だからできたこと、というように書いたのですが、地域で生きるということは、過疎でなくてもできるということがイタリアで実践されています。このイタリアの実践とべてるの実践がどうつながっているのかはまだわたしにはわかりません。ちょっと調べてみようかと思ったりしています。

しかし、日本の精神医療体制というのは、医療観察法などというものを作り上げるなどあまりにもひどい。この予断と偏見からなる体制はまず真っ先になんとかすべき課題としてあるのではと思っています。

ひとつだけ気になったこと、それはバザーリア派というひとたちの中で、「犯罪ということで精神病患者も責任をとるべきだ」というような意見を述べている記載があるのですが、そもそも犯罪や「精神病」の発病ということが差別や抑圧の中で起きてくることとしてらえたとき、そのような自己責任論が語りえるのであろうかと思っていました。

ともかく、今日精神医療ということを議論するとき、この本は必読書になるのではと言え得ます。

たわしの読書メモ・・ブログ 84

- ・すぎむらなおみ+「しーとん」『発達障害チェックシートできました  
ーがっこうの まいにちを ゆらす・ずらす・つくる』生活書院 2009  
書評を『図書新聞』2972号 2010.7.3 に掲載

たわしの読書メモ・・ブログ 85

- ・川口有美子『逝かない身体—ALS的日常生活を生きる』医学書院 2009

この本はALSで亡くなった母のこと、介助の記録、介助するものたちの実直な気持ちとその変遷を綴った私小説風のエッセーです。ひとは迷いながら、試行錯誤しながらなにごとかをとらえていく、なんともすごいエッセーです。

有り体に言えば「生きるということの大切さを教えてくれる」となるのですが、なんて書いてしまったら空回りしているといしか言いようのない、重さを感じています。

筆者もいろんな思いがあって、一時自分が作ったHPで尊厳死を主張したりしていました。そこから、全く反対な立場に転換していきます。介助の態勢がつかれば、トータル・ロックトインという「何も意思表示できない」と一般的に言われる状態になっても身体と対話できる、身体の温かみの中で対話する、それなのに人工呼吸器をつけないで死んでいく多くのひとがいる、「迷惑をかけたくない」とか「尊厳」とか言う言葉の中で、殺されていく、そんなことを告発する立場に転換しています。しかも、そのことの強力な貴重な論者にさえなっています。

「植物状態」ということばのもつ差別性ということが問題になっています。ですが、「植物状態」という言葉が妥当するかどうかは問題になりますが、筆者はそこまでも反転させて、「植物状態」の美しささえ突き出しています。

わたしは、反転ということをずーっと突き出しているのですが、これほど根源的に反転を突き出そうとしている書はありません。

わたしの中で立岩真也さんの本『ALS 不動の身体と息する機械』医学書院 2004 と連動し

ています。立岩さんの本が理論書としたら、この本はそのことを最大限のインパクトをもってひとびとの心に訴えかけ届かせる文です。「「障害の否定性」の否定」をテーマにするわたしは、みんなに届く本を勧めるとしたら、この一冊を示します。

さて、どうもわたしのつたない文ではこの本のすてきさを逆に減じてしまいます。

筆者の本からいくつかの箇所を抜き出してみます。

筆者は「当事者の意志を尊重する」として母の意志を確認しようとしています。その母、奥底に生きたいという思いを抱えながら、迷惑をかけないようにと人工呼吸器をつけない方向で進んでいました。そこで、緊急に運ばれた病院で、はっきり言葉にならないことば、「あうれれ」（42P）と声をふりしぼります。「助けて」。そこで、筆者は「ひとは生きたいのだ」という思いに行き着きます。エゴイストということばがでてきます。ひとは、生きることにおいてエゴイストでいい、エゴイストを許さない世の中なんてそれこそが許されないのだと思いたに至り着いたようです。ですが、そこでもひとが自分の身体を動かさない中で、コミュニケーションがとりにくさ、介助の態勢が作れない中で、当事者と介助のしんどさが募っていきます。そういう中で筆者にも「尊厳死」という思いが出てきたようです。

ですが、しんどさが落ち着くと共に、介助の態勢が作れる中で、思いが反転します。

「体温だけでもできるだけ長く幼い子どもに与えつづけようとする者もいる。身勝手に死ねないと、むしろ自分があなたたちのそばにいてあなたたちを見守るのだと誓う患者もいる。／実際のところとてもたくさんのALSの人たちが死の床でさえ笑いながら、家族や友人のために生きると誓い、できるだけ長く、ぎりぎりまで生きて死んでいったのである。だから、あえて彼らのために繰り返して何度も言うが、進行したALS患者が惨めな存在で、意思疎通できなければ生きる価値がないというのは大変な誤解である」（181-182P）

そして当事者の橋本操さんとの出会いがあります。「根性がないからTLSになる」という提起、それを筆者は介助者に向けられた言葉として受けとめます。介助者のコミュニケーションを取ろうとする努力をどきまでやったのかという批判として。（211P）

反転の箇所は他にも「家族が患者を見るのではなく、患者が家族を支えているというのである」（221P）

「医療に管理されながらも、刹那的にいる。用心深さと大胆さが同居しているそんな生活は、たとえばALS患者なら不動の修業の末に獲得できるものであろう。いわゆる死生に関するさまざまな学びの場で、死に向けて準備することや「死の教育」の大切さばかりが言われるが、長く生きていた患者は死に方どころか、「いかに生きるか」も学ぼうとしない。そればかりかALSというこの病気では死なないこと、対処療法で長く生きられることを知る患者たちは、できるだけ死の予感を遠ざけて享樂的に生きようとしている。／平凡な健常者の私には彼らのイチかバチかの生き様がすごいと思われるばかりだ。どんどん悪化していくのに、「いつでも今が最善」といえる感覚がよくわからない。それに、「現在は最善と最悪の接点」というが、現在を「点」に見立てて生きる厳しさも、時間をそのように意識したことのない私には、とうてい想像できない。・・・中略・・・だから、

わざわざ確実に死なせる準備などしない、そしてどのような生き方がよいかなどと健常の者が教えたりしないというのが、たぶん正しい接し方なのである」(223P)まるで、禅問答や悟りのような世界です。

で、あとがきの最後の文がこの本の意味を示しています。最後の文の読者との共振の希望も含めて。「辛い？ 苦しい？ が繰り返されるなかでさまざまな工夫や知恵が生み出される末期の看病と、そこにたしかに存在する希望とをわたしは描いてみたかったのですが……。／そう思うとなおさら、今の医療は希望と祈りの時間を手放して、法の力で彼らを死に廃棄しようとしているような気が看してなりません。／でも、声にならない病人の本音を、その身体から聞いてしまった人たちは、彼らの手足になり、できるだけのことをしていくでしょう。」(265P)

さて、本の表紙、そして文の最後に夕焼けのすてきな写真があります。帯にも「ALSは、終わらない夕焼けだと思ふ。」という文があります。その写真のわびしさと美しさ、それはひとの生ということ、その「別れ」のわびしさを示しているのかもしれませんが。この本は単なる記録を超えて、すてきな文学的な本でもあるのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 86

・障害学研究編集委員会『障害学研究5』障害学会(明石書店) 2009

毎年一回学会の前に出される機関誌的な雑誌です。

最初に学会でのシンポジウムの報告があります。どうも少しずつ遅れているようです。

2007年のシンポの記録です。

最初の特集—シンポの報告は「障害と分配的正義—ベーシック・インカムは答えになるか？」

障害学のテーマにベーシック・インカムがあるのですが。わたしの中で少しずつ、何が問題になっているのか、明らかになってきています。

要するに、障害学で論じられている、ベーシック・インカムは再分配論なのです。わたしはネグリ／ハートのベーシック・インカム論が最初頭にあっただので、どうしても分からなかったのです。ネグリらのベーシック・インカム論は構造改革的なところで再分配論にとどまらない、分配論、生産論にさかのぼろうとする論なのです。

問題は、福祉—再分配論ではパターナリズムから脱し得ないのではないかということです。そのことは人権や倫理では問題は解決し得ない、という唯物史観の今日的産み直しからするとらえ返しです。

さて、もうひとつの特集は、「障害学とろう者学の対話は可能か？」というシンポジウムの記録。

これは、『障害とは何か』の著者でシンポジウムの話者の星伽さんの「障害学の側で障害とは何か、ということが煮詰められていない状況だから対話できない」というところに話は落ち着いているようです。ところで、この問題を論じるときに一番肝心な「ろう文化宣言」の問題が抜け落ちているのです。その中で、「ろう者の問題とは障害の問題というよりはむしろ民族問題である」という提起があります。この論理ではむしろ位相が違うとして

対話しえないということになっていきます。しかし、実はこの宣言は「ろう文化宣言以後」という中で「ろう文化宣言」を出した当の二人から撤回されています。しかもどうも、それが障害学サイドからの働きかけがあり、その中で起きたようなのです。しかも、どうもそもそも障害学自体が「社会モデル」を巡り錯綜し、障害概念があやふやになっているという現実があります。

ところで、わたしはろう者学と障害学の対話は、言語や文化の違いによるコミュニケーション障害というところで対話し得る可能性があると思うのです。それこそが、「社会モデル」の意味とその援用なのですが、そのあたりがすっきりしてきません。どうもシンポジストの選定の問題があるのではないかとわたしは思っています。それは星加さんは障害概念を「障害者」と呼ばれているひとたちの問題から広げることには反対しているひとなのです。そうすると、医学モデルの批判も徹底化できないし、そもそもろう者学と障害学が対話不能になるのではないのでしょうか？

今一度、障害概念の再度のとらえ返しと、そして「ろう文化宣言」のとらえ返しが必要になっているのだと思います（わたしはそのことの中身を既に提起しています。わたしにはそのことが届いていかないということの総括が必要なのですが）。

さて、もうひとつのこの雑誌で取り上げておきたいこと。それは荒井裕樹「文学で読む『青い芝』－文学研究と障害学の交点」の論文です。青い芝はその活動においていろいろ紹介され、コメントされているのですが、その運動の担い手で、行動綱領の執筆者横田さんの詩人としての側面にスポットを当てた文はほとんど書かれていません。貴重な論文です。

たわしの読書メモ・・ブログ 87

#### ・前田拓也『介助現場の社会学－身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』

生活書院 2009

これは大学院生が研究テーマを介助ということにおき、アルバイトを兼ねてC I Lの団体に介助者として関わったところでできた論文を基調にした本です。

介助の手足論とそれに対する批判ということを中心に論が展開されています。このあたりは、この本の中では、ジレンマということまで終わっているのではと感じてしまうのですが、わたしは、自己決定が奪われてきたということの中の自己決定のための手足論に走っていったことで、当事者主体ということが押さえられたなら、そもそも自己決定とは何かということも含んでももう少しすっきり提出できるのではという思いを抱いていました。

この本の中でも、この本の一番共鳴したところですが、手足論の<よって>ということを超える<おいて>という関係論的な観点を突き出しています。むしろ青い芝のひとたちが「(介助を受けるとき)腰を上げるのも労働だ」というような突き出しをしていたように、協働、共振という側面さえとらえられるようになるのではないかとも思っています。

この本を読みながら、世代間ギャップのようなことを感じていました。

この文は、介助が有償化され、その中で介助活動のことについて書かれていた本です。

わたしの世代は有償化される以前のことを知っていますし、そこで有償化批判の議論がでていたことも知っています。確かに時代の流れは介助の恒常的保障とすることで有償化されていったのですが、それはあくまで、利用者も介助者も生活のために必要ということで制度をつくったにせよ、基本的な関係はきちんと押さえられていたはずです。それが、この本を見ているとどうもその基本的関係が風化しているのではないかという思いが湧いてきます。

まず、介助を「負担」というようなところでとらえる観点がわたしには分かりません。

運動というとらえ方がそもそも違うのです。筆者は自立支援法とかの反対運動とかいわゆる「政治的活動」を運動として押さえているようなのですが、介助がそもそもいかなる共同性を作っていくのかという運動なのです。介助ということに反差別共生の運動—活動として押さえる観点がありました。例えば、今日ボランティアということは無償のことだけで押さえるようになってきているのですが、わたしもそもそもボランティアということをかかわりそうな人を助けてあげるみたいなパターナリズム的なところであったことを批判してきたのですが、欧米ではボランティアはむしろ共同性をいかに築いていくかとのことでおきていること。そういう意味では、そういう共同性の構築という運動の中での介助活動ということが位置付けられるはずですが、筆者にはそういう観点が希薄です。だから、「良い」活動であっても「負担」ということがついて回ります。

楽しいかどうかは別にして、きっと楽しさのようなこと（感動という意味で）もあるにせよ、有意義な活動なのです。確かに過度の拘束や過度の活動があればそこに負担があるにせよ、きちんと態勢がつくれれば、そんなことはないはずですが。

昔読んだ本に『こんな夜更けにバナナかよ』という本がありました。そこで描かれていた人間模様は、介助の中でひとひとが何かを得ていたことを描き出しています。

決して「負担」ということではなかったのではないかと思います。

盛んに、介助者は辞めることができるけど・・・という非対称性が指摘されています。そういう現実がある、その厳しさがあることは重々承知しています。ですが、例えば、青い芝の横塚さんには介助者が介助まちをしていたとか言う話もあるようですし、わたしはこれからむしろ需要と供給の逆転が起きる可能性を考えています。

それはベーシック・インカムあたりの議論とつながります。ベーシック・インカムなどをするとひとは何もしなくなる、というようなことをいうひとがいるのですが、果たしてそうなのでしょうか？ 休日に朝早く起きて釣りに行くひとがいます。家庭菜園に生き甲斐を見出している人もいます。危険の伴う冬山登山に行くひともあります。まして、ひととひととのふれあいとしての介助の楽しさを求めるのを「負担」としてひとは斥けるのでしょうか？

もうひとつ分からないことがあります。それは赤ん坊の世話をしている親が、おしめをとりかえたりするのを「負担」とか感じているのかという話です。親の介助をしている子どもが摘便とかやります。慣れとかルーティン化とか言う話もあるのですが、生きていて欲しいという思いが先に立って、「臭い」とかタブー的なことを斥けるのではと思った

りしています。

排泄介助はひとこまです。そんなことが全面に浮き上がってくるのでしょうか？

わたしは「障害者」で青い芝の横田さんが言ったとかいう、「障害者」は自分の立場で活動していくべきで、恒常的介助に入るべきではないという提起が頭にあって、本格的に介助の経験をしていないのですが、それでも何回か「障害者」の介助をし、また、脳腫瘍で抗がん剤で髪が抜ける中で悟りを開いた修行尼僧のようになり、無垢な幼子のようになって逝った義姉の介助とかもホンの一瞬ですがやった経験からすると、交代がないというしんどさを抱えなければ、介助ということは「負担」になるのだろうかと思ったりしています。

確かに、パターンリズムのかわいそうなひとを助けてあげるとか、お金のためにと割り切って介助をしていて、介助の楽しさをつかめないままなら、排泄の介助とか「負担」に感じるようになるのでしょうか、そういうところでないところで介助をになうひとたちにとって、排泄や、性ということがそんなに全面一前面にでることなのかなと、思ったりしていました。

わたしには共同性論があり、そこで介助を考えるので、空論だとかセンチメンタリズムとかいう批判ももらうかもしれません。でも、目的がはっきりしたところで、活動しているひとはそのことが前面に出て、「負担」ということが退くのではないかと思います。

勿論、筆者も介助が長続きしないでどんどん変わっていくことの中で介助者が社会に輩出されることを通して、社会がよりよい方向になっていくということを書いていたりします。

だから、むしろ逆にどういう社会を作っていくのかというところで介助に関わっていく、介助のはっきりした目的が「お金」やパターンリズムや自分の名誉心のようなことを上回っていたならば「負担」ということが、この本のように前面に出てくるのだろうかと思ってしまうのですが、・・・。

この本はきつともっと別の読み方ができて、そこで共鳴しえることもあるのかと思いますが、「負担」というような論調が気になってそのあたりを読み解けないままにこのメモを書いてしまいました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 88

#### ・石川准『アイデンティティ・ゲーム－存在証明の社会学』新評論 1992

この筆者は「障害者」の障害学の草分け、「障害者」の学者の草分け的存在のひとです。そして、この本も障害学の草分けの本、わたしの中でも、障害学の必読書という思いがありました。

で、何度もこの本を買おうかという思いがありました。しかし、この本のタイトルにひっかかって買うのをためらっていました。そして、障害学研究会での筆者の講演で、この本でも出てくる座標軸的な図への批判も書いていました。

わたしもアイデンティティということばを使っていたときがありました。ですが、このことばが「精神障害者」「知的障害者」に対して抑圧のことばではないかという思いが出て

きて、それからほとんど使わなくなっていました。で、この本のタイトルをみて、何をいまさらアイデンティティ論かという思いだったのです。

筆者の論攷は古い枠組みのままではないかという思いがあったのです。この本の中でも、「個性論」などという古い枠組みでの議論もできます。

筆者は「障害者」エリート的な道に踏入、能力主義的なところに陥っています。それは「存在価値の防衛」ということばにも現れています。

ですが、「存在証明にやっきにならない存在証明」というところでの新しい模索が筆者にはこの時点にもあったようです（そのことは最新の本での能力主義への反省というところまで転換していくのですが・・・実はメモだけ作って、このメモの仕上げを次のブログ（89）の後に書いています）。

ともかく「障害者」で学者を目指すひとのロールモデルとしてこの筆者の存在は大きいことがあったのだと思います。

今の時点では「存在価値」という概念自体の解体というところまで至るでしょうか、意識論的なところにとどまらない、論攷まで進んでいくでしょうか？

たわしの読書メモ・・・ブログ 89

#### ・石川准『見えないものと見えるもの—社交とアシストの障害学』医学書院 2004

石川さんの本二冊目。障害学会が発足し、筆者が初代の会長になるころに脱稿している本です。

「視覚障害者」の読書法、いろいろ勉強になりました。しかも、筆者は学者というだけでなく、ソフトの開発にのめりこんでいるとのこと。有料での開発と、無償提供も。ブログとかでユーザーと対話して、いろいろ求められますのめり込んでいくようです。

贈与論みたいな話とリンクしていくのですが、ゲゼルシャフトの贈与とゲマインシャフトの贈与は位相が違うのではないかなどとったりしています。

この本は、エッセー風に思いついたこと、感情労働論や異文化論みたいなはなしも出ていますが、ずーっと、能力主義的なことが出ていて、感情労働というところでは反差別というところからのとらえ返しのようなことが抜け落ちていたりとか、違和感を持っていたのですが、「配慮の平等論」あたりからぐっと引き込まれていきます。

ただ、多数派にはすでに配慮されているが、少数派には配慮がされない社会と言うことでの批判の指摘は面白いのですが、わたしは少し違うのではないかと思います。というのは、ひとつの被差別事項において、少数派—多数派ということがあっても、他のいろいろな被差別事項があり、被差別事項をほとんど持たないひとはいないからです。

そういう意味では多数派などいないのです。それにそもそも差別のマイノリティ理論というのは間違っているとわたしは主張しています。それは植民地において、植民者は植民地人にくらべて少数派であっても、差別する側にいる場合が多いのです。性差別や資本家の労働者への支配の問題を考えると、マイノリティ理論は破綻します。そこでマイノリティを権力関係—ヘゲモニー関係としておさえ直すひとが出てくるのですが、それはそもそもマイノリティ理論には「自然的な数の問題」という物象化というところから出てきていることを曖昧にし、論理を混乱させる話ではないかと思うのです。権力関係で言えば、マ

イノリティということばでなく、ヘゲモニー論として展開していくことではないかと言います。

さて、この本は能力主義的な言説がずーっと気になっていたのですが、最後あたりで、べてるの家の話がでてきて、自分の能力主義的なところを、他の「障害者」に対する差別的なこととしてとらえ、自己がそうあってしまうところを反省的にとらえ返すに至ります。このあたりは立岩さんを批判していたところが、立岩さんの論を展開していくことにも通じています。このあたりは、この本の執筆をしていて、転換していったのか、それともしかけて展開していったのか、よくわかりませんが、わたしの筆者に対する距離感が一挙に縮まりました。ただ、そのあたりは、そもそも社会が能力主義的であるところから筆者もそれにとりこまれているととらえるところで、「社会」をどうするのかという問題にわたしは至りつきます。そのことは筆者もこの本の中で触れている労働感—仕事観あたりにリンクしていきます。これは今話題になっているベーシックインカム議論あたりともリンクしていくことではないかと思ったりしています。基本所得保障—基本生活保障がなされたところで、介助ということが、そして労働と言われることが仕事として転換していく可能性の問題などにも展開していくと新しい論が展開できるのではないかと思います。まさに筆者のフリーソフト的なところでのサポートの仕方ということは新たな仕事のあり方をしめしてくれているのではとも思ったりしていました。

たわしの読書メモ・・ブログ 90

・倉本智明『だれか、ふつうを教えてください！』理論社 2006

この本はヤングアダルト新書と名打ったシリーズとして出された本。

障害について中高生にも読める本、すーっと読める本です。

筆者は障害学を担うひと、障害学会から出されている本の編集共著のとして活躍しています。その論理性、整理していく力に注目しているひとです。

この本は、自分自身の「視覚障害者」の立場から、自分の体験を軸にして、障害とは何か、「障害者」は何を求めるのかを読みやすい文で書き綴っています。

で、共生のあり方、「視覚障害者」の抱えさせられている問題、「軽度—重度」と分けられる中で、「軽度」と言われているひとが逆に困難さを抱えさせられている問題、サポートのあり方、関係の結び結び方などを書き綴っています。

要するに障害ということ、その存在を無視され排除される中で作られた障壁としてとらえる「社会モデル」の立場から解き明かしています。そして、ブロックで（医学モデル的に）一様にとらえるのではなく、ひとりひとりのニーズをとらえ返すというところに至りつくのだと思います。

また、その障壁を無くしていく、サポートのあり方を、「今、目の前にいるひとをしっかりと見据える」事から始めるとしています。これは単に「障害者」との関係だけでなく、ひととひととの関係のあり方総体に及ぶことで、まさに「障害者の住みやすい社会はみんなが住みやすい社会である」というユニバーサルなところを指し示している本です。この本は学校の副読本などとして使っていける、使ってほしい本です。単なる障害についての学習だけでなく、ひととひととのあり方を考える本として。

たわしの読書メモ・・ブログ 91

・向谷地生良『「べてるの家」から吹く風』いのちのことば社 2006

「べてるの家」の本の編集をしてきた向谷地さんの単著。自分のことを比較的書いています。何冊も読んでいくと、何が問題になっているのかがとらえられていきます。

日本ほど「精神障害者」の施設への収容率が高い国はないのですが、地域で生き得るといふ実感をこの書は与えてくれます。

たわしの読書メモ・・ブログ 92

・斉藤道雄『悩む力ーべてるの家の人びと』みすず書房 2002

『もうひとつの手話』の著者ジャーナリストの斉藤さんの書。

ジャーナリスト斉藤さんの外から見た「べてる」。斉藤さんの書は、ひととひととの関係を見れてる、かなり感情移入した取材。

反転やひととひとのつながりの大切さを示してくれています。ひとは何かというような問いかけまで含んで。

たわしの読書メモ・・ブログ 93

・斉藤道雄『治りませんようにーべてるの家のいま』みすず書房 2010

斎藤さんのべてるの本二冊目。

べてるのひとを丹念に描いています。筆者のその感性の鋭さ、そして掘り下げの深さ、そして文学作品とも言い得る文のタッチ、ひとのところに響いていきます。

べてるの直接的関係者の本をいくつか読んできたのですが、これまでになく、しんどい「べてるの家」の「問題だらけ」の状況をかなり詳しく書いています。

社会のありかたから規定される病気ということを押さえていて、社会の閉塞状況と、「病気」から抜け出させないことがリンクしているようにとらえられます。関係性のしんどさからする反作用としての「病気」ということが浮かび上がってきます。べてるのひとたちは、むしろその感性の鋭さゆえに病気になったのだと。そこで、「病気になる力のない」自分というとらえ方をしています。べてるのひとたちは、そのような中で、治さない、治りませんようにという反転のさせ方をしています。そのことはむしろそこで開き直って生きるという側面もあるのでしょうか。

ひとと人との関係の在り方、ひとは何かということまで考えながら、べてるのひとの関係のとり結びということの中に、筆者は将来の社会像をとらえようともしているようです。これほど対話ということや支えあいということをしているコミュニティがあるでしょうか？ むしろ「社会」が病んでいるのかもしれませんが。

べてるの家はそこに関わってひとの強力な個性ということなしに作りえなかった共同性で、偶然性の重なりあいの中で作りえたこと、しかし、偶然の中に必然性がとらえられます。日本の「精神障害者」の施設収容率の高さが繰り返し批判されています。べてるの実践は、地域の中で生きていく道すじを示しています。抑圧状況をなくしていくことこそが

必要なのだとの思いを抱かせます。抑圧状況をなくし、軽減したところで、「病」はあるのかという問いかけには、答えがないかもしれませんが、少なくともしんどい状況がなくなる、それこそ、それほど苦痛なくつきあえる状況になるのではと。

たわしの読書メモ・・ブログ 94

・浮ヶ谷幸代『ケアと共同性の人類学—北海道浦河赤十字病院精神科から地域へ』

生活書院 2009

浦河べてるの本を何冊か読んできたのですが、べてると密接な関係にある浦河赤十字病院の看護師のケアに関する深い論考と、それからべてるのひとたちと地域との関係からとらえた、人類学的・民俗学的フィールドワークです。

「専門職的ケア」とそれだけで進む精神医療の批判から「普通の顔の見えるケア」を定立しようとして、その交叉するところで、看護職あのあるあり方を、べてる流というピアサポートのある地域から相互作用するこの病院での実践をとらえ返す作業です。繰り返し「顔の見える看護」とか「見守る」ことの意味とか、「実践知」とか「身体知」とか、「身体化された空間」を大切にするとかということばでその実践をとらえ返そうとしています。

べてる流というのは、精神医療の限界の自覚と自制から、「治さない医療」とか非「援助」ということを突き出しながら、ピアサポートに返ししながら、相互作用的に進める「医療」です。それらのことは、「〇〇してあげる」ということではなく、「〇〇の手伝いをしてあげる」という当事者の主体性を押さえることとしてあり、なんのための看護職かということとを繰り返し問い、そして先に患者がいるという観点を押さえ直します。

非「援助」というのは、医療の限界を知り、当事者のピアサポートの力、場の力ということを押さえながら、専門職の当事者性を問いながらなしていく、現在進行形の、「見る者という観点から、歩く者というざらし」をなしながら、ゆらぎ、他者性の自覚を持ちながら、そして、サポートということを一方向のことでとらえない、互いにサポートしあうこととしてとらえていきます。

この本は看護職のとらえ返しの作業が軸になっていますが、それだけではなく、浦河という地域での地域住民と、当事者、病院との関係を押さえる作業もしています。浦河という地域が先進的地域というわけではなく、もともと偏見から自由ということではなく、それでも、「商売ならいい」というところで受け入れられていき、互酬性ということで、そして顔の見える関係として、まだ十分とはいえないまでも、それなりの関係を築けているということとして押さえられています。互酬性というとらえ返しは人類学的なとらえ返しなのでしょうが、それは看護職についても言い得ます。このあたりは筆者は書いていませんが、わたしサイドからすれば、唯物史観的なとらえ返しにもなっていると思ったりしています。

この本の研究の立場は次のところに示されています。

エスノグラフィの記述にとって重要なのは、対象世界に対する超越的な「まなざし」をもつ「見る者」の視点を回避し、フィールドという「場」にともなっている「歩く者」の視点を獲得することである。「歩く者」の姿が対象社会の人々をも含めた私たち人間の日

常の現実であるならば、人類学の営みとは、以下のことばに示されているように、フィールドに生きる人たちの世界と日常を生きる私の世界とが<地続き>になる場所を探すという試みにほかならない。(371P)

さて、わたしはよくこのフィールドワークが受け入れられたと驚いているのですが、それはべてるが日常的に見学者に開かれてあり、講演をして回っているというところにおいて作られた開かれた場で、筆者が関わり得たのでしょう。以前、文化人類学で常用されている「参与観察」ということばへの違和を書いたのですが、この研究は自らをサポートされるサポーターとして位置づけることによって成立したのだらうと思います。どういうフィールドワークかによるのでしょうか、そこにまなごしの差別があり、自分の立場が問われるとき、「見る者」ではなく「歩く者」としてサポーターとして関わったところで、この文章を書き得たのだらうと言い得ます。

さて、浦河の実践は他地域まで波及しえるか、という問いかけがこの本にも出てくるし、おそらく読者のみんなが懐く思いなのですが、わたしの中でフーコー批判とリンクしてしました。確かにフーコーの微視的権力論は面白いのですが、大きな権力との関係が捉えられなくなっているという問題です。このことはこの本の課題から外れているのですが、労働ということが「安心してさぼれる」というところで、青い芝的な労働感ともリンクして、障害差別的なところに収束しないのですが、それでも、共同主観的な意識から自由でないということも、この本から読み取れます。そして、過去のトラウマだけでなく、当事者たちの現実的な関係のしんどさも読み取れます。ですから、「差異の網の目」ということばがでてくるし、「構成された看護」や「構成された患者像」というところが出てくるところを、ずらし、ゆらぐというところだけではない、構造自体を問題にしていく観点が必要になってくるのではないかと思うのです。あくまで、運動家としてのわたしの立場からのとらえ返しですが。

もうひとつ気になっているのは、医学モデルー社会モデルー生活モデルという併記です。これを筆者は運動の方向性として出しているのですが、そもそも障害をどうとらえるのかという認識論的なこととして、医学モデルから社会モデルへの転換が突き出されていたので、そのことを押さえた上で、方向性の問題を出されるのはいいのですが、何か混乱をひきおこすのではないか、などと思ったりしていました。

いろいろ余計なことまで書いてしまいましたが、ともかくこの本は自らを問い続ける姿勢と、掘り下げた論攷において、歴史に残る書として記されると思います。

たわしの読書メモ・・ブログ 95

・立岩真也/斉藤拓『ベーシックインカムー分配する最小国家の可能性』青土社 2010

立岩さんが同じ大学の若手と共著という形で出した本です。

立岩さんのこの本の中の第一部の文はこの本の出版社の青土社の『現代思想』に連載されていた文からのピックアップです。

立岩さんの論攷は「障害者」の存在を否定するような論攷の批判を自問的な対話、他者

との対話の中でやってきたひと、立命館大学で「生存学」というプロジェクトを推進し、そのテーマは「障 老 病 異」。「異」ということの中に他の差別への対話もとらえられ、障害概念を拡大しようとする試み、その論理のなかにすでにベーシックインカム的な論理がとらえられ、ずーっと注目していましたが、とうとうベーシックインカムを主題にした本が出たと、書店で見つけて早速買い、他の読書計画の中に急遽挟み込んで読みました。

ベーシックインカムの若手研究者の齊藤拓さんの第二部の文は、筆者と共鳴するヴァン・パリース『ベーシックインカムの哲学—すべての人にリアルな自由を』勁草書房の論攷の紹介とそこから独自の理論の展開。そして第三部でベーシックインカムの日本語文献の紹介、そして紹介だけでなくそこで自分のコメントを挟んでいます。これはベーシックインカムの貴重な資料です。

また感じてしまいますが、違和を感じてしまったところ。著者の二人とも、市場原理にのっとったベーシックインカム論なのです。で、その内容を見ると、わたしから見るとどうも市場原理を否定する論理も展開され、そのことが資本主義的生産様式—市場原理と併存可能なのかという疑問を懐かざるを得ません。わたしがそもそも最初にベーシックインカムの論攷を知ったのは、ネグリ／ハートの『<帝国>』で、ですが、そのベーシックインカム論はイタリア伝統の構造改革路線の過程として手段としてのベーシックインカム論ではないかと押さえているのですが、そのあたりの押さえ方がなされていず、そもそもベーシックインカムということ自体が最終的な目標とされているようにしかとらえられないのですが、わたしの誤読でしょうか？

わたしは『資本論』を読み込み、資本制生産様式論というひとつのまとまりをとらえれば、そこから一部を除去していくような試みは果たしてなしえるのか筆者たちの議論には疑問を懐かざるを得ません。確かにケインズ的な「福祉国家論」も修正資本主義としてあるのですが、そこでの所得保障的なことはパターンリズムやスティグマ的なことから脱け出せるわけではありません。

また筆者たちは生存の保障ということベーシックインカムの議論、倫理のようなところからなしきろうという指向性も感じられるのですが、そもそもマルクスが唯物史観を打ち出した意味も脱け落としているのではないかと思えるのです。市場原理ということそのものの止揚ということがベーシックインカムの実現のために必要であり、厳密に言うと、それは所得という概念でなく、立岩さんもこの著で問題にしている介護とかも含めた生活保障の問題なのだと思います。

マルクスの「能力に応じて働き、必要に応じて取る」ということを、能力という概念をとらえ返す中で、「必要に応じて働き、必要に応じて取る」ということで、読み替える必要も出てきます。

立岩さんは市場原理はなくならないというところから、議論を始めているのですが、そもそも市場原理の中身をとらえ返したときに、ベーシックインカムと存在論的に併存可能なのでしょうか？

たわしの読書メモ・・・ブログ 96

・安積遊歩『いのちに贈る超自立論—すべてのからだは百点満点』

## 太郎次郎者エディタス 2009

この本の筆者は「青い芝」の思想を受けとめ反芻しながら、アメリカの自立生活運動とのリンクをピアカウンセリングと自らの生きることの中で実践してきたひと。それは、自分と同じ「障害」の子どもを生子「子育て」の実践として体現されていて、その自己の経験を語っています。フェミニズムとのリンクや、国境を越えた関わりとかも実践していて、障害問題で、入りやすい読みやすい本としてこの本は語り継がれていくと思います。

子育てで「健全者幻想」にとらわれそうになりつつも、きちんと自己をみつめつつ、「障害の否定的なこと」を否定しつつ生きる実践は多くのひとの心に届く書になると思います。

刺激的な論攷も見られます。

痛みということを「痛みは、「どういうふうにしたら、いのちを心地よくできるか探っていくよ」という、からだが発するサインだ」30p というようなとらえ方をしています。

プライバシー論では、プライバシーなどと言っていたら生きられないとぼーんと退けています。

この本の題名にもなっている自立論「障害者の自立生活運動をするなかで私は、「自立」ということばがあまりにも一人ひとりにとって違うことに驚いた。私より年配の人たちは、自立というと、即、経済的な自立を思うようだ。また、学校教育では、人に迷惑をかけないとか、なんでも自分ですることが自立という。／しかし、自立生活運動をとおして、私たちはそれらとはまったく違う自立観を築いてきた。自分で選び、自分で決めること、つまり、「自己決定権や選択権を行使できること」が自立であり、それらを保障する社会をつくりだすことが私たちの仕事である、と捉えてきたのだ。／私はそこにプラスして、「よりよい相互依存の関係を築くこと」が、もっとも重要な自立だと思っている。すなわち、助けあう関係をつくり、ひとりでなんでもすることを極力なくしていく方向性を選ぶことが自立なのだ。」152p

筆者はピア・カウンセリングをアメリカで学び、日本に持ち込んだひと、特にコウ・カウニングの「泣くことの意味」ということを実践として示してくれています。

最後に、エコロジー的なところにつなげる「障害者運動」の方向性を呈ししてくれています。

この本は自立論の必読書になるでしょう。

### たわしの読書メモ・・・ブログ 97

#### ・ニキ リンコ『スルーできない脳ー自閉は脳の便秘です』生活書院 2008

ドナ・ウィリアムズの本『自閉症だったわたしへ』を以前読んだのですが、こちらの本が細かい「自閉症の特質」を描いています。と、言っても、自分自身のアスペルガーとADHDの重なったところからの、他の仲間へのつながりの中での提起です。

周りのひとたちに「自閉症の特質」を知って排除しないで付き合っていて欲しいというところでのこの本の執筆です。キーワードを突きだし、キャッチコピー的な提起はとても読みやすく、「自閉症論」での基本文献として歴史に残る本になるでしょう。

### たわしの読書メモ・・・ブログ 98

・マルセル モース『贈与論』ちくま学芸文庫（筑摩書房） 2009

商品経済以前の、更に物々交換とは区別される贈与論。

以前から読んでいた本の中でこの本が出てきていて、読んでおかなきゃと思い続けていた本。

まあ、何とも読みにくい本です。他の本を紹介するのですが、きちんと引用せず、ページ数だけ書いていて、それら参考文献を脇に置いて引きながら読まなきゃ意味が掴めなくなります。それに本文より多い註、こんな読みにくい本はありません。本格的に学習するひとはそこまで手間をかけて読むのでしょうか、わたしのように一応読んでおきたいという不純な読者にはつらいものがありました。そもそも読み方を間違えているとわたしが批判されることでしょうか。

さて、この本は現代社会のすなわち資本主義社会の定式を覆す、利害関係とは遊離した贈与論を展開しようとしている文化人類学的な研究なのですが、いまひとつはっきりしません。

わたしなりにこの本との対話とそれから何を抽出していくかを考えています。

この本で書かれているのはアニミズム的贈与ということなのですが、それは裏を返せば、宗教という粉飾を取りのぞけば、自然との共生ということで、自然の恵みを共同性として成員に返していくしくみということになるのでしょうか？

ただし、長老支配的上下関係とか、共同体間的な上下関係がその中に含まれているので、問題は錯綜していきます。そもそも筆者が何を主題にしてこの本を書いているのかがいまひとつ掴めないのです。

この本は、それを専門にするひとにとって原典ともいうべき本、しかし、わたしのようなアクセスで中途半端な勉強をしても得ることはほとんどないままになってしまう典型ともいうべきこと、内心忸怩たる思いのまま、取りあえずメモを残しただけです。

たわしの読書メモ・・ブログ 99

・フェルディナント・テンニェス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト

—純粋社会学の基本概念』理想社 1954

この本のタイトルが気になっていました。実際、わたしも自分の文の中で、ゲマインシャフトーゲゼルシャフトという概念を使おうとしています。一度読んでおこうと思い続けていた本です。岩波文庫から上下ででていたのを持っていたのですが、あまりにも古く変色して読み辛く、積ん読していたのを、古本でA5版の本を探し出しやっと読めました。

読んだ率直な感想は—「期待はずれ！」

自然と文化という対概念から類推したゲマインシャフトーゲゼルシャフトというところに収束するのですが、修辭的・警句的・エッセー的な文で、経済的な論攷は時代的に少し先行したマルクスをなぞろうとしているだけ、なぞっていないところは何か論理的におかしいということを感じてしまいます。

特に気になったのは「性別」に関する論攷、既にフェミニズムから「男が文化で女は自然か」というような批判が出ていますが、まさに昔の古い性差別的論考に陥っています。まあ、当時の一般的な性差別的なとらわれなのかもしれませんが、・・・。

それにそもそもこの本が何をテーマにして書かれたのかもすっきりしないのです。

それでも、テニエンスのこの本の意義は、この対概念を突き出したところにあるのではないかと思います。結局、現在の的にこの対概念を改めて咀嚼し、そして明らかに分けていくことではなくて、要するにエレメントではなく、モーメントとして押さえ直したところで、内容的に両概念を含み得ることもあることをとらえ返したうえで、使っていけることではないかと思えます。

もうひとつ、気になっているのは、テニエンスが描いたゲマインシャフトにおいて、長老支配というようなことが当然のこととしてでていること、このあたりはもう少し文化人類学的なとらえ返しが必要になってくるのではと思っています。わたしの学習としてはなかなかそこまで広げられそうにないのですが、・・・。

たわしの読書メモ・・ブログ 100

・マルクス（望月清司訳）『ゴータ綱領批判』岩波文庫 1975

マルクス再読に迫られて読み直した本。

以前、岩波文庫の旧訳版（西雅雄訳）で二回は読んでいたのですが、なにかきちんと掴めないでいました。今回の望月訳の訳者解説で、この文書が出てきた歴史的なとらえ返しとして丁寧に説明されていて、ストーンとおちるような何が論点なのかそれなりにつかめたようです。

ゴータ綱領というのは、1875年ドイツの労働者党が合同するに当たっての綱領なのですが、当時ドイツで影響力をもっていたラサールの影響下でおかしな綱領になっているという、当時イギリスにいたマルクス・エンゲルスの批判、この本の中心は「ドイツ労働者党綱領評注」ですが、資料として前後する綱領や書簡などもあり、輪郭がつかめます。

焦点になっているのはどうやら国家論のようです。今日的にはプロレタリア独裁を改めてどうとらえるのが論点になるようです。プロレタリア独裁ということは、当時はアナキストとラサールのような国家の援助という国家の物象化の間でマルーエンによって独自に形成された論なのですが、当時から強権的執行というところへの批判があり、独裁という語が妥当かどうか、マルクス自身もほとんどこの語をつかっていないという指摘もあります。

それにしても、マルクスたちの国家論がスターリニストたちによっていかに改竄されてしまったのか、プロ独概念の今日的な読み直しと共に、国家論を改めて整理し、共産主義論を生み直していく必要が問われているようです。

たわしの読書メモ・・ブログ 101

・廣松渉『廣松渉マルクスと哲学を語る—単行本未収録講演集』河合文化教育研究所 2010

廣松さんの講演集。

編集・解説の小林さんの文にもありますが、短く要点をまとめているので入門書的になっています。

記憶していなだけかもしれませんが、新しいコメントがあちこちにちりばめられています。

たとえば、パラダイム転換—関係主義が物理学、哲学、仏教という順で押さえていったという話。エンゲルスの再評価、国家—共同幻想論はエンゲルスを軸に展開されたという話。また自然弁証法には二層があり、エンゲルスの後戻りも単純ではないというようなこと・・・。

その他、疎外論と物象化論当たりの論考にも、ちょっとこれまでになかった展開も（記憶していないだけ?）。唯物史観の持つ意味も、改めて確認。

もう一度、廣松さんの文を全部読み直したいのですが、ちょっと無理でしょうね。

たわしの読書メモ・・・ブログ 102

・『現代思想 2010年6月号 特集=ベーシックインカム 要求者たち』青土社 2010

特集と立岩さん連載のベーシックインカムの論攷だけ読破

山森さんと立岩さんの対談があり、その後山森さんの新書版（次回 103 のブログ）の本に沿った各論的論文が掲載。ということは山森さんの本を読んで気づいたのですが。読む順番を間違えたよう。ちょっとまとめた論攷を書きおこうと思っています。

たわしの読書メモ・・・ブログ 103

・山森亮『ベーシック・インカム入門』光文社新書 2009

よくまとまった論攷。この本を最初に読むことだったととらえています。ただしいまひとつ定義があいまい。資本主義生産様式論から整理し直す必要を感じています。まとめて論攷を残します。

たわしの読書メモ・・・ブログ 104

・『現代思想 2010年3月号 特集=医療現場への問い 医療・福祉の転換点で』青土社 2010

医療と障害—ケア—福祉の架け橋的論攷

各論が面白い

医療的ケアを巡る杉本健郎さんと立岩さんの対談 人工内耳 イタリア精神医療 「性同一性障害」 臓器移植 ALS 新薬開発 予防接種 病苦論 医療政策 老い（順不同）と盛りだくさん、いずれも障害問題とつながっていて、参考になりました。

ひとつひとつコメントしたいのですが、ここで書きおきたいのは「人工内耳は聴覚障害者の歌を聴くか？」の上農さんの論文。人工内耳を取り入れようとしているひとは、「聴障者」同士の交流の問題をスポイルさせているという指摘は的を射ています。それにわたしはマージナルパーソンの問題を押さえておく必要があると思います。

もうひとつ猪飼さんの「海図なき医療政策の終焉」は医療政策の場あたりの対策の歴史と、今後の医療とケアの連携という課題の提起。

たわしの読書メモ・・・ブログ 105

・橋木 俊詔／山森 亮『貧困を救うのは、社会保障改革か、ベーシック・インカムか』

人文書院 2009

格差問題で社会保障問題を論じてきた橋木さんとベーシックインカムを論じてきた山森

さんとの対談

社会保障の全体像がとらえられ、それとの対比でベーシックインカムということが浮かびあがってきます。そういうところで、すごく興味深い対談なのですが、そもそも福祉ということをもっと掘り下げてとらえる必要があるという思いがあります。

もうひとつ、未だにベーシックインカムということの定義があいまいになっている、という思いから抜け出せません。

繰り返しますが、ベーシックインカムについては今論考を深め、文を書いているところです。

たわしの読書メモ・・ブログ 106

・『**情況 2010年 07月号 [雑誌]特集 沖縄の歴史と闘い 障害者解放運動の今**』

**情況出版 2010**

『情況』はわたしの本の出版してもらった会社の関連会社の雑誌。それ以前から買っていたのですが、ここのところ毎号ちゃんと買っていました。しかし、拾い読みしていただけたのですが、この号にわたしの文をとりあげてもらい、また「障害者解放運動の今」という特集で、「精神障害者」関係の文が載せられています。それでちゃんと読んでいたら、他の特集も読んでいました。自分が総体的な運動で浦島太郎になっていたことに気づきました。きちんとアンテナをはって、いろんなことを吸収していく必要を痛感していました。

「精神障害者」の特集は、改めて医療観察法が「障害者運動」のひとつの大きな軸になるのではないかと、という思いを抱きました。

沖縄特集が面白いです。基地問題から琉球独立論が浮かびあがっているようなのですが、ずーっと脈々と続いてきた琉球論、ネシア＝群島論（琉球弧という概念を持ちだして、インドネシア、フィリピン、琉球、ヤボネシアの弧の中での琉球を位置付けようとしていたりしています）、群島のもつ文化論みたいなところを展開しているところが、面白かったです。ここにも草の根の運動が脈々と続いているのだと。

『情況』でいろんな特集が出ていて、わたしがついていけないでいたのですが、幅ひろくつなげつつ、そこの中に何かを見いだしていく、わたしももう少しちゃんと世界を広げなくてはと思っています。

ちなみに、「障害者解放運動の今」では、「精神障害者」の運動関係以外では、『星子が居る』の最首悟さんへのインタビュー、わたしの文、大賀達雄さんのわたしの本への書評も掲載されています。最首さんへのインタビューの中で、わたしの文へのコメントを貰っています。対話を広げ深め得たらと思っています

次回は青い芝関係の文が載るとか、期待しています！

たわしの読書メモ・・ブログ 107

・後藤好吉彦『**身体の社会学のブレークスルー—差異の政治から普遍性の政治へ**』

**生活書院 2007**

ポスト構造主義的観点からの身体論を通した障害問題への論究。

おもしろく、これはポスト構造主義からからする障害問題を論じた歴史に残る書になる

のではという思いが湧いてきます。現代思想の身体論的な論考に対するコメントが凄く刺激的でした。

いくつかの論攷に疑問も出てきたりしていますが、細説すると長くなるので、ここで展開するのは禁欲しておきます。

ただ、ポスト構造主義の限界が浮かびあがってきます。ただ、意識的なところでの働きかけに収束してしまうのではないかと、という思いが湧いて来ます。

また、すぎむらさんの本の副題から援用すると、ゆらぐ・すらすというところに収束し、つくるところには至らないのではないかとという思いも出てきます。

唯物史観的なところからの切り込みが必要ではないかと。「マルクスは資本主義社会では乗り越え不可能な思想である」というテーゼが生きてくるのです。

## 『反障害原論』への補説的断章（2）

なぜ、今マルクスなのか

—『反障害原論』の隠されたサブタイトル—

『情況』誌に「廣松物象化論の反障害論—『反障害原論』の隠されたサブタイトル」という文を載せて貰いました。廣松シュレーのひとたちとの対話を求めたところで書いた文なのですが、対話不能ではないかという批判をもらって、うーむとうなっています。その文のサブタイトルが「隠されたサブタイトル」ですが、出した後で、本の中でそのことに触れているので隠していることではない、むしろ「前面に出さなかった」ということだと思いを直していました。

隠していたのは実は「コミュニズム論としての反障害論」で、そこでいつかそのことを前面に出した文を書いてみたいと思っています。

さて、コミュニズム論といったらまず思い浮かぶのは、マルクスなのですが、最近、マルクスを引き合いに出すと、何を今頃マルクスなのかという応答に出会います。

「マルクスなど出すと相手にされなくなるよ」という話も出てきます。

もっとも、格差拡大の中で、そして正規雇用から派遣・臨時雇用への転化とその拡大の中で、嘗てなかった生きることさえおぼつかなくなる状況下で、マルクス再評価の機運も少しは生まれてきているのですが、それでもマルクスアレルギーは強いようです。

わたしは宗教批判をしているので、「マルクス護教」には無縁ですし、宗派批判をしていますし、教条主義的にマルクスを引き合いに出しているわけではありません。

問題にしているのは、社会主義は崩壊した、もはや社会主義などの可能性はない、というところで、現実に抱えている問題の分析を、現在社会の枠組は変わらないというところから、問題を掘り下げることが止めてしまうという事態が生じていることへの批判なのです。

それならばいっそのこと、世の中変わらないよと、社会をよりよくするという活動などしないとして、享楽主義的にいければいい話です。

まあ、何か生き甲斐を求めて、研究を続けていくというところで、自己表現的に研究活

動を続けるひともいるのでしょうか？

わたしは『反障害原論』で、障害問題の分析をし、障害差別の土台には労働力の価値を巡る差別があり、そのことの止揚のためには労働の廃棄、賃金労働＝賃金奴隷制の解体、労働の仕事化が必要という展開をしました。その突き出しのためにマルクスの現在社会＝資本主義社会の分析を使ったというだけの話です。

で、マルクスなど使えないというひとは、では、障害とは何か、という分析を自分でぜひやってほしいのです。

そもそも‘障害’という言葉を使うひとが、言葉の定義もなさぬままに、混乱の極みの中にいるという状況があるからこそ、実は文を書くことが嫌いなわたしが『反障害原論』を書かざるを得なかったのです。

さて、話を変えます。冒頭で書いたコミュニズムの話、コミュニズムとは何かということとは、マルクスもほとんど展開していません。将来の社会像など、そのときにならないとわかるものではない、とかド・イデの有名なテーゼ(「共産主義というのは、僕らにとって、創出されるべき一つの状態、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは、現実の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の諸条件は今日現存する前提から生じる」)があるのかもしれませんが、ですが、どうも議論をしていると、何かしら出さざるを得ないとかいう思いも出てきます。マルクスが出したのは「能力に応じて働き、必要に応じてとる」という(『ゴータ綱領批判』の中の)有名なテーゼ、これは反障害運動的に言えば、能力主義にとらわれているということになります。実は、この間わたしが障害関係の本を読んでいて、将来の社会のあり方を示しているのは「障害者」とそれを取りまくひとたちの実践ではないかと思ったりしているのです。本人たちはそんなことに引き合いに出されたら迷惑だと叱られるかも知れませんが、「べてるの家」の実践の中で突き出された労働概念のとらえ返しや、障害学会の石川准さんの『見えないものと見えるもの』の中で出てくるフリーソフトの提供など、将来の「労働」、すなわち仕事のあり方を示しているのではないか、ここにも「障害者運動」のユニバーサルな性格(「障害者の住みやすい街はみんなが住みやすい街」という中から、「障害者の利害」が運動がユニバーサリティをもっている)がそこにあるのだと思ったりしています。

もっと、そのあたりを突っ込んだところで一文を残したいと思っています。

### (編集後記)

◆「通信」隔月発行予定がすっかり遅れました。母が骨折して、看病とその後の生活の再建にはりついていました。注目している立命館大学の「生存学拠点」のテーマが「障、老、病、異」なのですが、その内の三つを体験したのですが、家族介助はいろんな思いが交錯するから、むずかしい、ということが、丁度読んでいた本にもありました。やっとペースを取り戻しました。

◆出した本とセットにする読みやすい新書版の本に取りかかっています。また、この「通

信」を不定期にするかもしれません。このままだと「こんなむずかしい本を書く、「障害者運動」の基本がわからないとんでもないひと」になってしまいます。なんとか早く書き上げます。

◆読書メモ、かなり膨大なまま、結局全部掲載。かなりばらつきがあります。ベーシックインカム議論の整理は、一定まとめた文にする予定です。

◆今回の『反障害原論』への補足的断章は往復書簡での議論の中で、マルクス回帰、再評価の中で書いたこと。結局唯物史観の生み直しの問題ではないかなどと思っています。

◆繰り返しですが、『反障害原論』の本は議論のために出したこと。出版の中で対話を求めていきたいと思います。この「通信」の読者のみなさんの批判・意見をよせて貰いたいです。書評などを雑誌や本関係の新聞に載せて貰う話もあります。書評という形で出してもらえたら、いろんな場、機会に対話をもとめていけたらと願っています。

## 反障害研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

### ■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

## 出版・掲載案内

■『反障害原論—障害問題のパラダイム転換のために』世界書院 10.1

■「「障害」への固定観念を覆す養護教員の真摯な試み—当事者が自らを知り、自らの生き方を選択する大事さ」[書評 すぎむらなおみ+「しーとん」]『発達障害チェックシートできました—がっこうの まいにちを ゆらす・ずらす・つくる』生活書院 2009]

(『図書新聞』2972号 2010.7.3)

■「廣松物象化論の反障害論—『反障害原論』の隠されたサブタイトル」

(『情況』10.7月号)